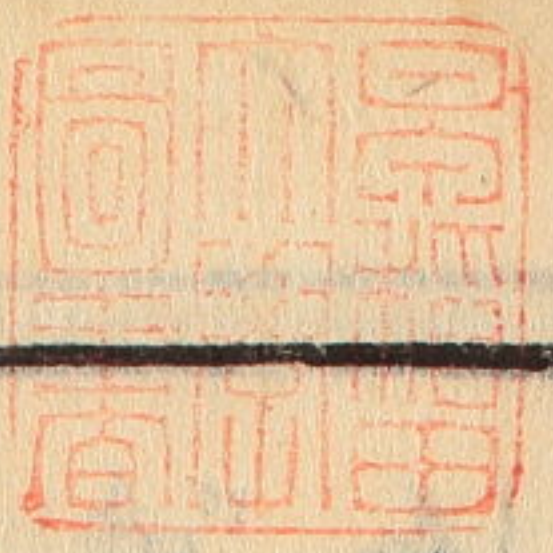




新著聞集
六

13
115
6





新著聞集

往生篇第十三



念力日光山了詣す 芥と二子に嚙す

網ひき利糸水了了終る

他人夢了了入詩と賦して終ると告

紫雲彩花諸人舉て拜了

大坂妙喜別時念佛

終をひりかて神祇了供物とる人奉る

姉乃鬼夢了了入念仏の了るるを告

絹川乃ニ冥念仏生と轉す

妬鬼とびと抱て念仏往生す

山鬼回向とてつとつと拒難す

若女聖号と唱へ終る 足と翹て念仏と母聖端と夢

幼女呪おび仏名とまらふ

八歳の童子呪了て念佛す

白子の宗西終了のぞんて遺語

龍燈室了入る彩花空る瓦

大げの撫夫はひのり他佛と又とて

成て行寺と知る

高謠衣と掩ふ

和州順西日と期して西る

恒式了るまらふ

書とねらて終て

預り葬所とて

誓願寺へ四十二年詣す

臥る蓮臺と擁す

生鬼寺了詣す

六歳の童子地と持て戯る

四歳の童子巧くかめ成期と志す

知遷和尚怨霊と問答す

七歳の童子海の巧く来迎と拜す

壯婦内のりく聖衆と拜す
如來降臨く多し勢至摩頂く多し
臭くく九氣西く倒て卒す
佐久間の竹黄金宮く生下
二通和尚法坐入滅す
毫光室く滿 遺骨念珠を以舍利とす
乃く蓮臺と拜く異香室く薫す
念信法師三たび好相と感す
利春法師友く詳く即ち往く

骨舍利く他く灰紫色く變す
爰中く三たび聖告く
異香四方く薫く花ふり多し
無智の信野天不來迎
珂軟和尚茶毘毘郁
慈愛信女聖相現前
壇通和尚遺骨舍利
屋上紫雲灰裏舍利
父母往生の傍相と告

幼女遺骨 踞踞合掌

蕨生して冥途の舍利と持来す

川崎教俊高曲終てとち

大坂の専西法流して終てとち

徳嶋の梅心臨末書句

頭上り光て故つ

念力日光山す諸す

成願隼人西尾張りて病ひくから我けしひの限

まぢらんてまれ志日光山すりりて終てとち

おのひりて先は下向し日光山の御さ

まし一族乃存中りりまりぬひくやゆま

病り旅ゆりのり無期なりとましりばその心ぬ

我宿意ハ遠せざるも清志日と待まりて終らん

とてそ日すりり水し衣服りりぬる

いぬるひりり灯のほるがとくに息とぬりり

それより南光坊より八日光山よりこれより一箇の日
それ内より一箇より東照宮より津廟前へ隼人をも
参詣のりしと見てぬ今も世と昔はあて
少く感慨一頓てはつて飛脚とて一箇の
津島へ收と述べぬひと是はあて家の記録及
上登二天師乃縁起より此を修りし

斧と二子より囁す

大坂おとま書乃吉兼とよ者ハ本ハ武士として今も
切よりしお信人としてはふる津より先非とてい

一向の念仏者としてし病者の重きものとしてつて轉苦
のりや吉兼同は吉兼のりし吉兼我ハ今
言より津新丁よりあてのりし一太の志とて
と此よりいぬとして兄弟のふたどらつともい
貪りこれに遺るべきゆかして斧一挺つ
一是して薪と割り世とよくはる我成後の
より金の知りしとて表意の下より鎌二貫又より
出よりし河津の妻より一桶より入り安も
とて吉兼のりしとて一は不乱より稱名し

きまびきしと今更ハ別世念仏ノ如きも
仏あり回向ノ君らも例のよきが所身ハ
長き回向ヤよの勞れもあらんぞと叫ハレ
呼吸の音もくゆりしこら

終てしりて世傳了供物と後ま

大坂の橋所十一屋宗佐よりよ者の妻若き比より
書典と山の佛法と信仰一本性ヤ所
慈愛しに深りて空室ハ心月ま口
詰まら前百日齋して及後一と云と女人

堂了終し金自ハカクてまて白くし股脚
針卷マてまのしと入りまの太服捨てま
院壇上谷ノ院ノ如く煩れし恙なく下向セ
しと地天和ニ多し時夜と煩ひ既了際終も遠
かびえくし附け世の世いふを以て三寸
らよそく日おの祓終了後してあつて
純一了終名し御新まがしとま

婦の靈蓋了り念仏の勝りて告

尾張町清水無事としよ者の後室智則

妻のいさむに天和三年五月廿三日念仏の聲
とて大御所へ一覽三巻言ふ智恵の妹
ハ五松原の帝の妻なりしおのゆめに智恵来て我
ハ安養へ一いつて微妙の快不と極めしこれにハ
我ら下りて光緒志言と唱らるゝ尤も貴き
このまゝ先回しく念仏してむりれと慥
告て差さめたり

絹川の二霊念仏生と轉す

下総白旗郡お丹生村の靈ありといふ者ハ入り

くしてつしお妻乃が孫の妻甚く醜きおに
心ふくもむかひしき之世者なりぬ絹川よはそ
り突ねし沈ね報し同村の法務新ら妙林
法名ハ吊ひしハ正保四年八月十一日ありそのち
とち妻と逢ひきともぬせりり五人たり六人
乃妻しすめ菊や産菊十三葉乃寛文十一
月中旬一母ハ身海をし聖の正月四日
菊しすめ日ニ一おのり同く本三日
泡と吐眼といしし父といし我ハ三千五百

左の者にしてハナリ一助と云ふ者有り度長の中
了絹川了て沈め殺さる一ふけい累が作
野の老のいづくをさる累る兄有りよ者母
助と地ふして産ふ家此所小の相り嫁まけり
りに継父助は生れ何りきといふて佐ふ言ハ
せよ中一向了り云り正母ふのふ碓く生ま
我ふ了りよせく心よ了誰人すすい候ん
絹川了りつまけりて後々沈め殺しり後

川乃居りてあそ西の夕暮りやしてハ五七歳の童と
又一人多かりハけ助が凶悪なるん祐天のく
すめをて十念と授ふ菊ら助うとてハ菊也と
よ助とてあまハやうに石るとよ頼て早到
直入と法名書とぬけく仏壇了りてせもれハ
茶指がしとてあましくあす助が仏壇へり
よハやうくの人くも雲烟のやうに雅き者の形や
又方とてけくハ忽ち光明ややとて家内を照
くちりよあも甚く情邪戡罪しとて

せいの西入と改修し一單直了念仏一丈室四
年亡月廿三日一終り一七日あつても成せり
て稱号は一々火聖相拜せり一りたつり一
つりて往生せり一り

姪龜頭を抱て念仏往生す

常州 松原村乃妻ありと一百姓の妻ハ其女に
て支婦れ中一もねり一いり何じかりし知る
妻病て死了るもけり一病出あつて後妻は
いふもふ何系何の何と一言を誓互に

候ともいふ口説はのよめはりしはく月日
と去て代友より妻きてハ望りどと何方を
了らるる一が遺れがうて後つととさういふ
それあつて此妻乃怨具妻して支乃首す
抱き候き教と何れをもちそれ恨めしおれ
難いえも云つしとあつり一恐まてうり
てりしちひゆり一天台宗のりるれを護す
し大般若てりもあつての新法と何り
何にさうしちひゆり一法美和尚とたのまん

信者とありぬ念仏をうとけりしゆく教りしありせ
くまのまこと信しし御女ありし人下にし候
るしうたにいと問ふまればあまのま佛の
まきりし作事とありし御法のおほくの回向
しし御のまことしにいとまきりし御生蓮が
しし御のまことしにいとまきりし御生蓮が
御法のおほくの御娘してありきまはる御位牌と
ありし御のまことしにいとまきりし御生蓮が
も御のまことしにいとまきりし御生蓮が

牌ハ戸びくりに張回向もそのけりし御生蓮が
まきりし御のまことしにいとまきりし御生蓮が
念比し細くは御位牌とありし御生蓮が

若女聖号とてかへ畢

大坂上町乃はる町にいとまきりし御生蓮が
敷十八歳貞享五年八月廿日より至
廿四日乃はる町にいとまきりし御生蓮が
界阿弥陀如来起世乃本願して親おとす
まきりし御のまことしにいとまきりし御生蓮が

足とはぬごと念仏して母聖瑞と夢る

下總国田郡羽丹生村乃庄なるくし者のみみ希ハ
一心不乱念仏し常く足とはぬごと歩む成
りてとよく若くやまらま、虫やど踏殺んりて
おとまかくハする也又案の板舟を日と婦に自れ
て弘經寺祐天和尚の許へまゐりて十念と受名号
とひ来て寝る其夜も熱し出に若くも
りてしも云ず唯一句念仏し父母も側
乃人をも勸めし勤まをり、宇丹土日に到り母が

夢入異香四方り薫り花空に降西乃方より白
装束し一人舟とこままきり黄らる装束揃
僧多きとまをて船とまよふり母娘に
弘誓の船も人も同し一葉のたしなみ叶
しとら山く見者より又音空くきこへて
あまらぬねのむ希ハ本枝ありかきとまを
念仏しありて聖日受念にして修行せしむ

幼女呪とび佛名とまよふ

阿州阿波郡板原聖幢寺乃家業利助がしよめ

三業乃極身方了母に抱く九君て光明真言
二三十遍隨求陀羅尼二三十遍念仏二三十遍唱て
後母が乳らびとくく天へつがくく二度
いひく瘧入がくく息くく一に臭香家内よ
薫くくく室ハ乃乃のり

八業乃童子呪とて念仏す

大坂道頓堀竹田迄いしりふ芝君乃笛吹本も
子ハ業ありしが瘧とくくい此牙に弱またの
りくありし時親ほくゆくくに依て真言宗これ

ハ光明真言とてくありの子ツ君て
海く遠くとて念と念仏十遍く唱
て目と少き地作りしとく

白子の宗西後と際と遺語

勢州白子の八助ハ有福の者少て世も公なとく
仁怒ありて極めく後世福くひありまらして芽
了世とゆづり法幹く宗西と号く怒了
く抹香とくまの信心のくを窺ひ
念仏と下めりりける時隣の妻不ふりて

遠御のこちありしが兼て友と志主一族朋友
れを悉くいせぬ人あり歩きたの三日より
日暮たのこし大樹寺よりつきて本堂の弥勒の
まへに塚堂合掌し念仏間りし中眠りて
息まへたりしと志主の信者あり生地のやま
まへにありて七日が方成骸と拜せあるなり
虚空より又免乃花より夜ハ龍灯ありて
堂内より入りしと拜し人多かりし
大御の樵夫はひより化佛と云る

大御の黒木よりより専修の念仏者ありしと
虚空より小き佛と拜しき月方まくに文像あり
拜まきせしむふいしと百萬返の万霊和尚より告
りれをみ方外ありしと相うへて人より泣くを制
しきぬいふるとる所ありしと心地ありきと
云し聖聚来迎ありしと毛眼あり拜しき
や人より告大御生と遂行し
處て行寺と
江戸通町中橋より守村といふ者煩ふりし

寛文七年二月七日一族の面くどつりて我
昨日像終す君岩寺了りて終んとて念比了
いふとて駕えたりてかの寺中の法忍坊が菴
了り入り珂山和尚と招き十念を授ちられ八日
了りぬり今日も彼岸あり我又彼岸にむ
せと戯れぬや
かの岸よりいりてまきハろく海なる
し念ひあり念ひあり念ひありぬ
高誼衣と掩ふ

土佐高知乃塚下水乃町地原とよ子者女二氣
近室二女乃其のころとよ子一病一ち七有たぬは
り親とむいひも其勘當一むり一弟と許し
き白りぬいぬの最期の願あり連枝八本同根に
て中りくつて冥途のゆりもつちんと涙を
とげり三十一は親の妙なる志と感とありい
堅く裁ちてきり一弟とむいひぬ一ちれを子人
涙がすすろろいひ盃移んころころとあり一我はひ
すききくろく東に一番音曲ふりくぬしそ

後人の必面ハ又にくきぬらうと衣ひきおひ合
仏數聲しく悲しませ

和易順西日と詔く西いひく

和州新在る所の目切の甚せし者ハ乃乃
あゝ律義ありし一宗家の比妻子ハ跡に五十
余歳の母とありし字多郡茂地村の伯系乃
惣ちあつ山の端とあらむ古き家の庵とせしむ西向
る戸口とありし隣郷の浜村乃奉養和尚と
まの母もも孤髪し母ハ妙意自分ハ順

西と号し一心不乱と念仏せし順西殿と云し
ハ我ハ八月十五日了淨生と遂るとりし
果しく八十一歳の八月十五日門の戸口に腰
ツも西了浄生と云ふ体とありて念仏
し午の刻了浄生と云ふし

恒式よたがんが

大坂天徳の興不町と秋岸とよ禪門の心
きつめて直りし人あり七十五歳貞享四年六
月了浄生と云ふし了浄生と云ふし

廿八日了佛了妙心光明遍照の文と唱念
數十遍のうへりて回向の偈とよと俯伏了
ちりおりのぬ

書とのじて終てとる

京室町山王町了る後をくといふ者り
性柔和にしくお智人の勝れり明曆二の
了りしお月日一通の書とのしぬ
お妻予が友ら人念仏の勝會といふて
すふ日ごにぞは貴き業と励ぬるふま

唐土の琴と断蘭了喻一りも携け
跡も一音乃了めりるま一葉とま
ゆりぬるて口の障なく持名しりぬ

預め葬取とスは

尾州相應寺の中東月院の僕小三郎十六歳乃時
墓取の空地とス多て是らん我葬所なり
日くらのりて掃塗せり聖の貞享四の月
すぬ日る念仏一了す

誓願寺へ四十二年詣す

京祇園町了理西とくきりめり信者了誓願
寺了日参了り四十二のちり暴風供了
日とくも更了りたてしとて天和二の九月常
了りる睡通了れどもはのち一じりり十七日
了り目り所了りしめ我のゆは日御生せん
二夜三日の別付はくめ了りれとて自ら安願乃
文と誦しかりく念仏し十九日辰乃了り
息く了りぬて四葉了り

野々々蓮臺と擁す

江戸日本橋二町目乃亥時ヤ七多矣とよ者の母は
純ハの葉の信心なりしを元禄十二の十月廿三日
了り願の座了り了りし画る末途の像とて了り
我ハ下品乃了り生了り了りて了り念仏
數十遍了り観音の蓮臺とよに了り了り
了り息く了りぬ
了り生鬼寺了り詣す
武州熊谷了り了り了り了り了り了り了り了り了り
了り了り了り了り了り了り了り了り了り了り了り

慈母聖母元福二の尊母了るまの此の如く列す
ゆりしつり恙なくたりて嬉しくとくを
いふ類このるありと云く八月中にすとし
きりり居るく女は日と乳母と懐く此の如く
で燈明のりありと云く此の如く念仏して
生れしとあり

知遷和尚慈寧の問答

常州飯沼弘經寺の道長知遷和尚甚るり
きりり一は長八尺ありれ大法師刀と提を

来る知遷吃して云く汝何をも法師のいづく
汝が智恵了るはるく不他と捨不の不他の
念あり慈教るれはるく知とぬき討くは知遷
了じも喋すし公法性本清妄念依何
法師曰法性本清依公濁来る知遷清濁俱本
無也法師曰法性本無也當無風波起知遷法
性論起滅よくはあり法師閉口して法性
を此より知遷心いさぎよく成り新法行ちかり
強隆の像ありし結伽陀聖一念仏のにして

延宝三の卯月才官了大徳寺とて多うらふ一山
築敷三層堂のふりてし種色乃花より異
香にふり薫くると傍始せ物奉て拜し
まうるのくや

大坂の寄る所のつらま迎て拜す

大坂松屋町通り瓦町三丁目末松の住家
徳之助七歳元禄五の卯夏よりまおしつり
一日は祖父家職つり中として病人
今日ハ病つりにせりて頻つりまけらに候

左ハ云ぞしつるハ今日親ハ歿す也と
長病のつられどもいささ死すべき物
しかどりて海を寄り候し午の刻
夕飯いそがし又我性全ちし
死すれ親兄弟いじりし
何れも遊好まうとて我ハ
まうの如き清むしり
り念仏して遊好とてまう

壯婦海のつら聖衆と拜す

授^{トク}う二親^{ニシヤ}と、夫^{トコ}と母^{ハハ}との十念^{ジュンパン}でも又^{マタ}家^ケ敷^シの夫^{トコ}と
了^{マツル}ハ三^{さん}念^{ねん}の如^{ごと}く十念^{ジュンパン}で授^{トク}う親^{シヤ}とくいとむすり
ワ今^{イマ}今日^{ケフ}もて授^{トク}う親^{シヤ}とくいとむすりも西方^{セウホウ}の如^{ごと}く
うとむすり立^たせむい^い勢^{せい}利^り茶^{ぢや}号^{ごう}額^{がく}と摩^ま
させむいぬ^ぬ痛^{いた}苦^く下^げしもすするむしと
念^{ねん}仏^{ぶつ}三^{さん}昧^{まい}了^ま了^り入^いり平^{へい}五^ご茶^{ぢや}了^り了^り性^{じやう}生^{じやう}のそ
しとむすり

奥^{おく}賣^う九^く茶^{ぢや}西^{せい}了^り倒^{たふ}き卒^{そつ}了^り

奥^{おく}州^{しゅう}壯^{じやう}唐^{たう}郡^{ぐん}小^{せう}竹^{ちく}候^{こう}の奥^{おく}賣^う九^く茶^{ぢや}ハ津^つ義^ぎ茶^{ぢや}

一の者^{もの}りれむ人^{ひと}と本^{ほん}よと監^{かん}ハ松^{しょう}島^{じま}ハ高^{たか}賣^うにむし
ちり了^り了^り日^{にち}中^{ちゆう}の法^{ほふ}とめ念^{ねん}仏^{ぶつ}中^{ちゆう}了^り了^りのるに
條^{じょう}の賣^う人^{ひと}とも所^{しょ}らぬあへりて損^{そん}とせし
とむすりれむ是^{これ}と面^{めん}目^めとむすりにおりいほるに
来^きハ三^{さん}念^{ねん}の如^{ごと}く大^{だい}なる敲^{くわく}き鐘^{かね}と二^に面^{めん}のち也^{なり}
たのく大^{だい}なる損^{そん}と掛^かハかど又^{また}来^きハの思^し
報^{ほう}了^り鐘^{かね}とすい^{すい}せんはりも念^{ねん}仏^{ぶつ}とむすり
了^りめり^り自^{みづか}ハ奥^{おく}くむすり行^{ぎやう}任^{にん}生^{じやう}所^{しよ}稱^{しやう}名^な
たう^{たう}は^は何^{なに}所^{しよ}我^{われ}由^{よし}法^{ほふ}日^{にち}法^{ほふ}也^{なり}せんま^{せんま}いとむすり

了り妻のさうとて越方の友家とほりてこれより
程ちうき川了りて水とあびぬと信め念はし
暁し言しその日の午の刻にうりにいりて
或ちりて手あひにやとて門了り出空と詠め内に
入り我を生せし為の方了り倒れをうんとて
了り念はし鐘とてし了り自身に念表へ
云に遠り西了り倒れをを生せりて

佐久間の竹黄金宮了り野に

江戸大傳馬町佐久間高松由とりの下女

天性仁慈乃志少くて湖夕乃飯我かハ乞食人
了りやどこしそののハやり船のそいおし又ハ
流しの隅了り網とあて置れのを降りし也を食し
了り了り口了り飯をて称名了りあり何頃死
せしに女も温まりしうは表やのやと人くあり右
了り了り遂に獲生了り了り了り冥途ののりて問
はされたりくともちり廣野と流し了り黄金乃
宮殿あり佛はし了り了りこれハ地がまる其まり
了り了り了り了り了り了り了り了り了り了り了り

光りいでてもありあり堂の内亦表の瓦はしぬ
まは遠目つら火の乃名又入て皆く
うらまのゆりお前受入りして終て死す
佛光の付くもたしとらんそは老河合松
う崎まててもす

遺骨念珠の舍利と云ふ

三縁山増上寺了學上人ハ寛永十一年四月廿日
念仏三昧よりして終つて一命を茶毘の後身
骨悉く舍利とすりて手に掛るも水持乃

珠數五色珠懸とてしゆさつ又舍利と云ふ

預め蓮臺とていへ異香室了薫す

如幻律師ハ檳州伍吉の杖用比丘の上足り病
病を侵しあれを大坂上尾町残雲軒とて
菴つて保養せりて延宝六年霜月十五日乃
曉天弥陀尊眼前了事いふく女も其の願
らるハ沙後日了成を成則其の蓮花ハ女が託生
の臺ありとて指をいふりして終つて初喜強
盛了して念の如きに念仏とてあり同慶

て問ふれむと云く〜と答ふ類も此の事なりと云
へ〜矣音室内了歎く有り〜と云十七日に御で
合掌稱名〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云
歎知足に〜と云〜と云〜と云〜と云
のとして奈ハ〜と云〜と云〜と云

念仏法師三つ好相と感す

證誓念信ハ此の取の人とりやると云ん
七月十日未の砂を〜に先年〜母とゆめ〜し
い〜我ハ今上〜念信い〜はも〜ハ

菩薩の〜と云〜と云〜と云〜と云
ゆ〜ハい〜菩薩の西相拜ぬえんと〜と云
忽悲〜と云〜と云〜と云〜と云
玉の指〜と云〜と云〜と云〜と云
董〜と云〜と云〜と云〜と云
誰〜と云〜と云〜と云〜と云
誰ぬ〜と云〜と云〜と云〜と云
村〜と云〜と云〜と云〜と云
忽ち〜と云〜と云〜と云〜と云

土了妙くぬくおほく菩薩の如く元海す中に
大蓮臺の如くして佛の如くすけり向く人とおほく
内へ忽ち文余りの坐像の如く金色のいろを
放して行者の身で照しくす即頭とれを拜
さる不ろ如まもろくの菩薩了りびりて
空を我の法問とすも身も向く所謂空を我の
但信乃稱名これ也と法法に於て菩薩衆
了り語らぬくやとるの菩薩の行者なり結縁
すのや諸乃菩薩念信了りびりてやいしん

半の如くして及て美法めぬ回く七日の如くはる美法なり
はしりともく目あり白蓮四流菴室の如く
了りかろて半内なりが間因自らも開目す
及く又美法室内へ薫すほのく八月二日
光明遍照の文と唱へ念信了り七下へん
来迎くと三つ告て微笑しとありき
利春法師友と許して即往
勢州鳥羽土井園障を多音提取し利春といふ
傍あり日來信心堅固の念仏者了りてゆり

ありけりし都りるまゝし心と所のそびたりし者
ゆもろくばりしおのまゝやけりもん相とれる
西くふりておの頻て方ぬるやういひし
業いふしと云ひしきてすゝ海りしゆのまゝおの
今注生丁方とて日中に當りし場生念草し
き声し念れしき人し不審くおのいひし
後し死て回音にたりししゆせんしに声弱
て眠ぐに注生しき人
骨舍利と化し灰此業色と書す

摺州東成郡放出しり出田寺の空山和尚の道徳
しそ人よく眠依りし御生のお二三日経るゆ
人の何しとてそよく歩きぬるし帰て快くい
そお曉天し僕とれしきみく妙水とワリし
我ハ今日注生丁方なりしゆもろく佛おと莊嚴
し香花燈明とせりし徐らりしゆ水しゆ白し
僕しゆ今注生念れしゆ細りしゆゆしし
あきて助音とせりし弱方ともゆき声し
まろべし回音の文たりしゆ十念と授りしゆ

了文べしと歎けしに發願文と誦し
光舟遍照の偈を誦し念仏をせめて願
ひ此の徳に文を誦し念仏をせめて願
ひ異世に息をぬ火葬を遺體ハ舍利
なり所ハ案布ししに寛文十一の五月十日也
世壽七十歳と云

夢中にニハハ聖告と蒙る
濃州(海西郡)一泊舟中より發念と云る及心者
手記をありしハ念仏の外他の事なきに寛文十六

八月十五夜了強陀の三尊来迎ゆりて海まの
今日(往)舟と遊るありし其の用意せしめありし
靈夢と云ふししにやまはるるものありし
こゝに其の對する事十五日又同日も夢と云ふ
其の事をもとめてししに信心と云ふ事にして人
かくしし事をもとめてししに八月十
三日の夜以後十五日午の卯(定)遊生するありし
人夢乃告と云ふも其を十四日了(新)に判
し十五日了(ハ)自(を)ま(し)ら(し)梅(本)を(も)は(り)

て好水清くかよへし里人に語りしハ清部既に三度
ふおまびらふ定めて今日際終にせしむるゆ
ぢり少くもいふもきりもたれどむらさ
戯れしと隣の者とも今日ハ祭念の御生り
あもあもぬもまきし儂し己の如く遊んで
開闢の鐘くちりし念にや詞は数百の
俗吳口同言すし新し念にや流す物にあ
もすしやうし祭念ハ鐘くちやめて左に
とうあまの指す右にまてしハ技まともし

いりうや安坐乃所て儼然しき徳の衰え
鳴りしうは嘘しくくはる煖氣あやしく
は手ぬんとすまにむく是く三日法人す
ゆせり

異香四方了薫し華あり多時
阿州阿波郡鏡原乃妙西尼ハ何乃許の人と
りやあまびら女幸西くものいふるまて
食念はすやの如くやうりあまの皆人
すあま何幸念にして往す妙西

サ新^{サキ}と^{サキ}の^{サキ}め^{サキ}て^{サキ} 惣^{サキ}と^{サキ}る^{サキ}に^{サキ}の^{サキ}ち^{サキ}ニ^{サキ}ふ^{サキ}り^{サキ}し^{サキ}て
か^{サキ}し^{サキ}新^{サキ}の^{サキ}の^{サキ}け^{サキ}し^{サキ}と^{サキ}る^{サキ}し^{サキ}あ^{サキ}る^{サキ}に^{サキ}は
と^{サキ}り^{サキ}て^{サキ}即^{サキ}日^{サキ}毎^{サキ}あ^{サキ}る^{サキ}む^{サキ}し^{サキ}の^{サキ}場^{サキ}合^{サキ}掌^{サキ}し^{サキ}念^{サキ}仏^{サキ}
乃^{サキ}と^{サキ}相^{サキ}談^{サキ}し^{サキ}て^{サキ}眠^{サキ}ぐ^{サキ}し^{サキ}て^{サキ}條^{サキ}終^{サキ}す^{サキ}異^{サキ}香^{サキ}室^{サキ}閉^{サキ}
了^{サキ}元^{サキ}と^{サキ}り^{サキ}て^{サキ}と^{サキ}隣^{サキ}に^{サキ}に^{サキ}薫^{サキ}く^{サキ}り^{サキ}て^{サキ}け^{サキ}り^{サキ}て^{サキ}
堂^{サキ}了^{サキ}る^{サキ}に^{サキ}け^{サキ}り^{サキ}て^{サキ}五^{サキ}色^{サキ}の^{サキ}花^{サキ}を^{サキ}あ^{サキ}ら^{サキ}す^{サキ}一^{サキ}日^{サキ}一^{サキ}夜^{サキ}り^{サキ}し^{サキ}
と^{サキ}り^{サキ}て^{サキ}

聖智の信男天樂来迎

聖智の信男天樂来迎
如^{サキ}た^{サキ}如^{サキ}の^{サキ}尾^{サキ}州^{サキ}名^{サキ}古^{サキ}屋^{サキ}中^{サキ}下^{サキ}町^{サキ}の^{サキ}人^{サキ}也^{サキ}也^{サキ}也^{サキ}

孝^{サキ}心^{サキ}や^{サキ}く^{サキ}後^{サキ}世^{サキ}の^{サキ}た^{サキ}も^{サキ}殊^{サキ}々^{サキ}と^{サキ}り^{サキ}し^{サキ}二十^{サキ}二^{サキ}の^{サキ}中^{サキ}來^{サキ}妻^{サキ}了^{サキ}
れ^{サキ}く^{サキ}ま^{サキ}し^{サキ}と^{サキ}れ^{サキ}致^{サキ}き^{サキ}つ^{サキ}を^{サキ}ま^{サキ}が^{サキ}う^{サキ}と^{サキ}あ^{サキ}親^{サキ}り^{サキ}辭^{サキ}して^{サキ}
家^{サキ}と^{サキ}弟^{サキ}と^{サキ}づ^{サキ}と^{サキ}十^{サキ}餘^{サキ}町^{サキ}を^{サキ}あ^{サキ}ら^{サキ}す^{サキ}花^{サキ}の^{サキ}末^{サキ}村^{サキ}の^{サキ}菴^{サキ}室^{サキ}
と^{サキ}あ^{サキ}ら^{サキ}ひ^{サキ}も^{サキ}づ^{サキ}と^{サキ}朝^{サキ}夕^{サキ}の^{サキ}儲^{サキ}け^{サキ}と^{サキ}只^{サキ}仏^{サキ}及^{サキ}の^{サキ}修^{サキ}り^{サキ}
と^{サキ}又^{サキ}日^{サキ}本^{サキ}の^{サキ}法^{サキ}名^{サキ}山^{サキ}の^{サキ}う^{サキ}り^{サキ}と^{サキ}回^{サキ}國^{サキ}す^{サキ}人^{サキ}の^{サキ}此^{サキ}と^{サキ}お^{サキ}ら
し^{サキ}書^{サキ}と^{サキ}よ^{サキ}め^{サキ}と^{サキ}す^{サキ}し^{サキ}ら^{サキ}の^{サキ}ま^{サキ}を^{サキ}あ^{サキ}ら^{サキ}す^{サキ}て^{サキ}い^{サキ}と^{サキ}く^{サキ}修^{サキ}り^{サキ}
ハ^{サキ}何^{サキ}も^{サキ}改^{サキ}め^{サキ}の^{サキ}有^{サキ}を^{サキ}よ^{サキ}ら^{サキ}ん^{サキ}ヤ^{サキ}又^{サキ}又^{サキ}問^{サキ}し^{サキ}ぬ^{サキ}ま^{サキ}は
他^{サキ}の^{サキ}非^{サキ}と^{サキ}て^{サキ}後^{サキ}世^{サキ}の^{サキ}ま^{サキ}を^{サキ}あ^{サキ}ら^{サキ}す^{サキ}ん^{サキ}只^{サキ}を^{サキ}智^{サキ}ら^{サキ}ん^{サキ}他
よ^{サキ}め^{サキ}と^{サキ}す^{サキ}一^{サキ}向^{サキ}す^{サキ}念^{サキ}仏^{サキ}と^{サキ}て^{サキ}進^{サキ}室^{サキ}七^{サキ}の^{サキ}ま^{サキ}を^{サキ}あ^{サキ}ら^{サキ}す^{サキ}

妙成ハ伊賀の巫上座の住人山奉岩と物とし武士
の女あり少々の時とて慈恵の心取くさうく天
正に一人のりま落るるがゆゑ一は諱
やありバ唯貪者なりれとて乞食とていひ
て下人とせれといふんも張が
おりのりやとして能成美のたぐひを後め下に
もてゑ乃日雪の朝なごハて施とてし
たり稱名專一にして佛の目おし出現し
又浄土七宝莊嚴乃具照がやきて親
はのり

あじきびく感見す行年八十六寛文二の
西了して正念して往はまなり
壇通和尚遺骨舍利
おるる先新寺壇通和尚念終したるひ大衆とあ
まはるる際終るる回音了念終るるや
數百人の多徒とて湯に入せしるる息
せしめふ山上りて火葬せしに異香自燃ふ
けりて迷音あせしり舍利とあり念終るる
六年極むる先と後ちありとあり

祐天和尙の禱堂アノ籠リ杖渡といのれらるに
お目と強て何のきりしもさうあれむいふも
かきしきよにわのひ一まをかやくらけし
晴天白日の雨道場にうらに雨やうしし也

屋上紫雲反裏舍利

は川根根田常寺實譽上人十年ぶりの病り
て寛永十九の八月十三日アワガ際終ハ十五日
のひそわのしりふ余今日アワガ終りて安んじ
あつむい念仏の念くもりの眠らぶさく

きぬひぬの肉をアワガ
鬘つて焚葬の後速灰ア舍利とゆふ也

亡父母往生の傍相と告

椋梨一雪の父幸温ハ寛永十七の四月廿九日に
しめ妻の妙女嫡子成田清閑甚し憂ふびみ
中陰ア亡父はうらにまのゆ達しく嘆ふらる
我ハ貴くも安養アしつるぬ疑くもアらん
これ又よとて袖とゆるるに氣のぬる
又し何となく光りアヤキア黄金の色に

してなりけり妙安も佳雨も同じやりにて是る
てくもさくも笑へていづく同舎一蓮の信也と
増す妙安ハ寛文八の十月十八日不承内りし
可一雪はてし父ハ安室住持一いふりか
母ハいづくはりとわりの言せしに貞享三年三月十
五日に暮り兄の佳雨巻の一書を携てこれハ母
妙安ハ観音大士のしるしをせしむるを記せし
女ハこれ又よとて雲ハ一とて破ぬ

幼女遺骨踏踏合掌

はる日本橋大石町乃倉橋惣と兼しり者ハ娘二歳乃
ころより佛よりい念仏をせしむるを母にせられ
もろが細雑乃よりせられ誰かよりせしむるに母の
今日よりハ佛前より香花を供へしんあらり
念仏してありし其の元禄十二年正月三日
怪しむるを母とかんして病くやうに日々にた
海へて十二月廿日の末父よりいれは曉は
るを二階の如来とせしむるをいへり父
顔色のかりとて頓て尊像をせしむる

しりしきふし新し念仏唱へつて本日のおり
る像よりきつくはつる偃を伏せしむる
息をゆるぬれゆる寺に送る火葬せしむ
骨佛額より長二寸をとりてまねの蹲
君をに似て片足と立て膝を張てまねを
あふむ踏踏合掌の相と行りしむる故口の
櫻所より遠州浅松法林寺に贈りしむる
蘇生して冥途の舍利と持来す
丹波舟井郡藪田村の山内彦忠といふ者

の念仏者として仁慈第一の者なりし元禄二の
節日二十七日を奉りて方海にまじりて蘇生
我冥途してまねをきりてけ佛舍利以て
まねを左の掌の中に光明赫燦と一粒と握
君より村人奇異の結縁とて群集し念仏を
三日の午の刻にまねの像を焼くに焼く
焼くし焼後二件の舍利ありしむる
まねはわらわらゆるびい人おしあはれを

川崎教俊 高曲終

江州粟太郡磯石村の河原教後とて武藝を好む人
ありと瘠く老ても尚後世のいづるをなかりしる
成身乃子と夫ていりめて世のまをたごるるを
以て任世体一向專修の念以者とかりぬ八十葉
延宝三年極月廿三日不家頼とすび我唄の
世とまるとり例のハ廿七日の餅とほりしごと唄日
可せしや三竹の廿四日一族を招き移んとる
と食意一紙今日世とほりしまくと難所の
益せん少とて數献するかり一巻の者一曲と

しめせし高らうと
唱ふまの佛も我もなりきり南無西法陀の声し
至誠心深心回向發願の聲は声耳に傳へてめや
由にいぬるけり一十聲一聲數のそ惜も
由にいぬるけり一十聲一聲數のそ惜も
中謀い修て佛といふい合掌し教返念仏
法身了聲やとろへて酉の卯と眠るごとく
あやもゆるし

大坂の專西法陀とて終とす

大坂所波伊達町久宝寺屋專西ハ齡ハ年七歳
まで生初了て本願寺日参せし一向の信者に
てありし貞享二年九月十六日小松橋系譜乃
用盡せしりて坊師了て十徳とすりて暮り
十八日念仏回り入夜中死す下招きいじま
後世也として知死と同時に入らるる念
我性ハ只今とすりてありと念
とありて生ずしりてありぬ

徳嶋の梅に臨末書句

阿州徳嶋に梅心とて連歌誹諧を嗜し人
頃八十二歳よりしりてめでたきありし
貞享四年六月九日入りて懐弟と
世ハ終るとえし暮れ一夜と
ころふまが心すりてありて
二句書の上して一向念仏ありぬ
頭上光とあり
京の六條坊門新町東入町に祐喜とい
る禪門ありしハ武士よりしりてあり

